

ハイデガー・フォーラム第18回大会

応募要旨1

(統一テーマ：悪)

「悪の凡庸さ」はいかなる意義をもつか ——アーレントの「倫理学」

本報告の目的は、ハンナ・アーレントにおける「悪の凡庸さ」を、アーレントの理論の体系もしくは発展におけるその位置づけを見直すことによって、その意義を再考することにある。具体的にいえば、悪の凡庸さは『人間の条件』の概念装置では対処できないタイプの悪であり、それに対する自己批判をつうじて、アーレントは後年の良心論に至ったというのが、本発表の見立てである。

よく知られるとおり、アーレントは、『エルサレムのアイヒマン』（1963年）において、アイヒマンを新しいタイプの犯罪者と捉え、その犯罪の邪悪さを特徴づけるうえで「悪の凡庸さ」という概念を用いた。2018年に刊行された *Thinking Without a Banister* (Schoken Books) に収められた、ヨアヒム・フェストとの対話（1964年）のなかでも、ハンナ・アーレントは、アイヒマンにおける想像力の欠如や犯罪的な動機の不在、官僚的性格など、『エルサレムのアイヒマン』からの一貫性を示す認識を披歴している。

だが、そのいっぽうで、アーレントはこの対話でアイヒマンについて意外とも思える特徴づけをしている。アイヒマンは「余人と同調することを欲し」「『われわれ』と言うことを欲する」。そして、余人と同調することは「共同行為 acting together」することを含み、「権力」を産出する、というのである。

なるほど、アーレントは、この共同行為には論議や意思決定、責任というものは欠けており、その「空虚な機能」というあり方を指摘してもいる。だが、共同行為やそこから生ずる権力それ自体は「善」とも「悪」ともいえず、「中立的」な現象であるとも語っているのである。この発言は、彼女が『人間の条件』の「行為」章において共同行為や権力にきわめてポジティブな意味を付与していたことに鑑みるなら、非常に意外な評価といえる。先行研究が、アイヒマンや「悪の凡庸さ」を、同じ『人間の条件』の枠組みでも「(共同) 行為」よりはむしろ「労働」の概念と結びつけて解釈するものが多かった（森川輝一、百木漠など）のも、同様の印象に起因しよう。だとすると、フェストとの対話での発言は、彼女の理論の一貫性にとって「逸脱」として切るべきものなのだろうか。

否むしろ、この発言から、「行政的大量殺戮」における「もっとも重要なコンベヤーベルト」たるアイヒマンを象徴的人物とする悪の凡庸さを逆照射するとき見えてくるのは、「行政的大量殺戮」という比類なき悪は、共同行為や権力といった契機を抜きにしては成り立たない、という消息ではないか。もしこれが正しいとすれば、悪の凡庸さは、共同行為や権力と無縁であるどころか、むしろそれらがあってはじめて成立するタイプの悪であるということになる。それは同時に、『人間の条件』における共同行為や権力には、このタイプの悪を防止するメカニズムが含まれていないことを意味しうる。

アーレントは『人間の条件』において、共同行為やそのなかでの人格唯一性の発揮といったことに内在的価値をみとめる一方、一般的な意味で道徳的といえるような善悪にかんしては相対主義的ともとれるよう記述を残している (*The Human Condition*, § 28)。道徳の実態は習俗 (*mores*) にあり、それゆえに時代に相関的なものであるともしていた。その一方で、彼女が「行為し語るといふ様態で共存しようとする意志」から直接生じうる原理であるとしているのは「約束」である (§ 34)。だが約束は、少なくとも論理的には、悪の凡庸さを防圧する機制になりえないように思える。あるいはむしろ、もし悪の凡庸さそのものが共同行為によって成り立ち、共同行為の基に約束があるのなら、防圧どころか、その成立にも積極的な役割を果たすとさえいえるかもしれないのだ。

このように考えてくるとき、アーレントが悪の凡庸さに対抗する原理として、『人間の条件』の諸概念を持ち出すことなく、『精神の生』などではむしろ思考と良心という「個」の倫理に向かった事実にも、べつの角度から光を当てることができないか。アーレントは〈私〉が私自身と対話することとしての思考にこそ良心という道徳的原理を見ているが、それは共同体や権力から離脱して〈ひとりになること〉を含意するからである。悪の凡庸さのような、共同体そのものが悪しき目的のために構成されているときには、積極的な政治参与は、むしろその共同体にとっての“善、すなわち悪しき目的の強化に順機能的に働いてしまう。なればこそ、自己との一致という良心の原理のみに従い、共同性の構成から離脱することこそ悪の凡庸さへの対抗原理となる。

以上を通して、本発表は、①権力や共同行為は悪の凡庸さに逆行的でも対立的でもなく、むしろ構成的であることと、②そうであればこそ共同性からの離脱をふくむ思考の「倫理」へと至ったというアーレントの思想の発展史的な展開とを、明らかにしたい。